

図書館へ行こう！

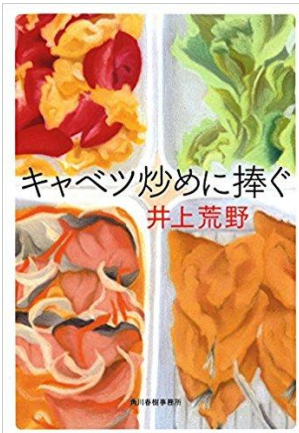
本を読んで、大学へ行こう

中学生も必見！ 今年のセンター試験から

(大学入試センター試験国語第一問) **有元典文・岡部大介『デザイン・リアリティー』**

私たちの生きる現実の世界はどのように創られつつあるのか。文化的に創られる世界を身近な切り口から柔軟に鮮やかに論じる。コーヒーショップ、焼き肉屋、コスプレ、腐女子、オタク、プリクラ、童貞…心理学系学術書の限界を軽く超えたフィールドを対象に、人間の人間らしさを支える文化的メカニズムを真面目に論考した「半径300mの文化心理学」。人間って何から出来てる？ 人間の本質って何？ 文化心理学の立場から、世界とそのつながりを読み解いた好著。2013年刊。

センター国語第1問(評論)は、人間の現実をデザインするという基本的条件について具体例を通じてながら論を展開している文章が出題されました。文章量が昨年より1割程度増えており、読むのに少し時間がかかったかもしれません。日ごろから集中して文章を読み取る力を養っておきましょう。



(大学入試センター試験国語第二問) **井上荒野「キュウリいろいろ」『キャベツ炒めに捧ぐ』より**
「クロquette」「キャベツ炒め」「豆ごはん」「鯔フライ」「白菜とリンゴとチーズと胡桃のサラダ」「ひじき煮」「茸の混ぜごはん」…東京の私鉄沿線のささやかな商店街にある「ここ家」のお惣菜は、とびっきり美味しい。にぎやかなオーナーの江子にむっつりの麻津子と内省的な郁子、大人の事情をたっぷり抱えた3人で切り盛りしている。彼女たちの愛しい人生を、幸福な記憶を、切ない想いを、季節の食べ物とともに描いた話題作。2011年刊。

いのうえあれの1961.02.04～平成6年直木賞受賞、父は作家・井上光晴氏。センター試験国語第2問(小説)は、彼女の長編『キャベツ炒めに捧ぐ』の一節から出題されました。女流作家作品から出題されたのは5年連続ですが、現代の作家の作品なので昨年一昨年と比べると読み易い内容でした。文章量は例年どおり約5000字です。

先生方おすすめの1冊

国語科 高妻正実先生のおすすめ
浅葉なつ著『神様の御用人』

ひよんなことから、神様たちの用事を言いつかる「御用人」になった主人公のフリーター良彦。方位の神である狐(モフモフ)と行動を共にする。「心余りてことば足らず」と言うように、人はその想いが深ければ深いほど、その想いを見つけれられません。「天眼」(人には見えないものが見える)を持ったがために孤独な神社の娘、穂乃香……。そして彼女の心を溶かしてゆく良彦。



神様の御用を聞き、その想いを何とかして一生懸命ことばにしようとする芳彦の一生懸命さに心打たれます。みなさんも「御用人」になってみませんか。

理科井上誠一郎先生のおすすめ道尾秀介著『ソロモンの犬』



「そういうことだったのか、だまされた〜！」この感覚がクセになってミステリというジャンルの小説を読み、みなさんにも毎年ミステリ小説をオススメしています。

今回ご紹介する『ソロモンの犬』は、先述の感覚一分かりやすく言うとスッキリ感がまったく得られないある意味オススメできない本です。

犬を散歩させている途中に交通事故に遭った小学生、その事故の原因を大学生の主人公・秋内が大学の友人や大学の先生たちと謎解きしていくストーリーなのですが、秋内の恋愛やアルバイトでの出来事も織り交ぜてあり、盛りだくさん。そのせいでストーリーがごちゃごちゃになったり、そんなオチ？…いやそれもフェイク！？さらにあの言葉の意味は？？？などと訳が分からなくなること必至です。

本当は、同著の『向日葵の咲かない夏』というオススメできない本を紹介したかったのですが、こちらは読後にスッキリしないどころかあまりにも気分が悪かったので、見送りました。興味がある人はどうぞ…。

著者である道尾秀介さんは『今夜はナゾトレ』というクイズ(なぞなぞ)番組に出演されていて、作品とは対照的。さっぱりした人柄みたいですね。